

カシミールの禁酒運動は どう伝えられたか

—1980年代初頭インドの新聞報道とセキュラリズム—

拓 徹

1 はじめに

本稿は、1982年3月にジャンムー・カシミール州（以下JK州）¹の南カシミールで起きた禁酒運動を題材に、カシミールをめぐる言説におけるセキュラリズムの問題を再考するものである。

1980年代のカシミール情勢には大まかに、ラジーヴ＝ファルーク合意（1986年）およびJK州議会選挙での不正（1987年）、そしてこれらへの反発からゲリラ戦が勃発する（1989年）という流れがあるが〔伊豆山 2011、伊藤 2007、Ganguly 1997〕、本稿の対象である禁酒運動はこれに先立つ時期、非武装のかたちで分離主義に与する若者たちが起こした運動である。その特徴は、それがカシミールの首都スリナガルではなく南カシミールの中心都市アナントナグで起きたこと、そして禁酒というモラル面での運動を通じて、のちにゲリラ戦を担うことになる世代の若者たちが社会的に意見表明した最初期の事件の一つであることだった。

本稿では、こうした特徴を持つ禁酒運動の詳細を掘り起こすと同時に、とくにこの事件の新聞報道のあり方に光を当て、そこにおけるセキュラリズムの問題を考察する。ここではまず議論の大前提となるインド・セキュラリズムの定義、および1980年代初頭のインドにおけるセキュラリズムの問題について触れておきたい。

執筆者紹介

たくとおる ● 所属なし 歴史人類学

・拓徹、2005、「カシミール人権政治の諸相」、アジア太平洋人権情報センター（編）『アジア太平洋人権レビュー 2005』、現代人文社、181-185 頁。

・拓徹、2010、「創成期の用語『カシミーリーヤット』について」、『現代インド研究』、1、159-176 頁。

インドにおけるセキュラリズムの語には、いわゆる政教分離主義の意味のほかに、インド固有のコンテキストに根差す意味合いもあるといわれる。政治哲学者ラジュー・バルガヴァによれば、

一つ特定の宗教グループの数的優位が他の宗教グループに不利に働きかねないこの社会では、セキュラリズムは宗教的マイノリティの苦難の回避のために存在する。それにはとりわけ、ヒンドゥーとムスリムの間の文化的・宗教的紛争の政治的表現に歯止めをかける意味合いがある。[Bhargava 1998: 1]

本稿ではセキュラリズムの語を主にこうしたコミュニティ間での中立性・公平さという意味で用いるが、1980年代初頭はこうした意味でのセキュラリズムが問題としてインドで重要性を増した時期だった。非常事態期(1975～77年)以降のインド政治では、ジャナタ党が中農勢力を後押しし、国民会議派がダリット、ムスリムを支持基盤として選び取る中、後者(ダリット、ムスリム)が孤立化し暴動などの攻撃対象となる過程が存在した[Sheth 1979]。とくにムスリムは、折からのイラン革命などの影響で「イスラム原理主義」とのかかわりを疑われることが多く、1980年8月のモラダバード暴動や1982年9月のメーラト暴動などで数多くの犠牲者を出した。こうした流れの中で起きたのが1980年に与党となった国民会議派による「ヒンドゥー・カード」の選択であり、その影響はとくにJK、アッサム、パンジャブそれぞれの州政治のコミュニティ化にみられた[堀本1997、Jaffrelot 1999]。

1982年にカシミールで禁酒運動が勃発した時点において、インドのジャーナリズムはすでにこうしたコミュニティ間の公平さを欠く空気の中にあった。そして、この運動をめぐるインド中央紙(ヒンドゥー寄り)とカシミール地方紙(ムスリム寄り)の報道には、双方とも基本的に自らの立場をセクラーなものとして捉えていたにもかかわらず、大きな隔たりがあった。こうしたジャーナリズムにおけるセキュラリズムのゆらぎの問題は、メディア言説が重要性を増した1980年代にあって、インド中央およびJK州における政治のあり方を大きく左右する問題だった。ではそれは実際にカシミールをめぐる政治をどう左右したのか、本稿ではその詳細を追って行きたい。

2 JK州特有のコンテキスト

1982年禁酒運動の詳細について検討する前に、その前提となる当時のJK州における政治状況、メディアの状況、および酒類販売の状況についてここで概観しておきたい。

2-1 1980年代初頭カシミールの政治状況

カシミールをめぐる第一次（1947～49年）・第二次（1965年）印パ戦争の一方の主役だったパキスタンは1971年、東パキスタン独立＝バングラデシュ建国によって弱体化し、これ以降、パキスタンの助力によりカシミールがインドから分離するという選択肢は現実性を失った。これを受け、1960年代を通じてカシミールの分離主義を体現した前JK州首相シェイク・モハンマド・アブドゥッラーとその国民投票戦線（Plebiscite Front）はインド政府との交渉に踏み切り、アブドゥッラーは1975年カシミール合意によって州政権の座に返り咲いた。すなわち、アブドゥッラーは分離主義を捨て国民投票戦線を解散すると同時に、かつて彼のリーダーシップのもと州与党だったナショナル・コンフェレンス党（以下NC）を再結成し、その党首としてJK州首相の座に就いた。このカシミール最大のカリスマ的リーダーが時勢を受け、インド国内での州自治権拡大をめざしてJK州首相の座にあった1975年から1982年9月（アブドゥッラー没）までの時期、カシミール政治は比較的平穏を保った。

他方、アブドゥッラーというリーダーを失ったカシミール分離主義はこの時期いったん影をひそめるが、姿を消したわけではなかった。むしろ1970年代は分離主義の再編成が進み、80年代以降の分離主義諸団体がかたちを整えた時期だった。1980年代を代表する分離主義団体であり、本稿が扱う禁酒運動の主役でもあったピープルズ・リーグ（People's League）が結成されたのは1974年のことである²。1977年州議会選挙の過程では、かつてのアブドゥッラーの同僚ソフィ・モハンマド・アクバル（Sofi Mohammad Akbar）を中心とする旧国民投票戦線メンバーたちによって、もう一つの主要分離主義団体である自由戦線（Mahaz-e Azadi）が誕生した³。1960年代末から選挙政治に参加し、70年代には国民投票戦線に代わって分離主義を担う政党となりつつあったイスラム党（Jama'at-e Islami）はそれでも基本的には宗教団体だったが、その

傘下のイスラム学生組織 (Islami Jami'at-e Tulaba、1977年結成) は、ときにイスラム党の意に背いてもラディカルな政治声明を出す明らかな分離主義団体だった⁴。当時はパキスタンが対インド的に弱体化し、カシミールの分離主義も1975年カシミール合意以降は下火であると考えられていたため、これらの分離主義諸団体に対してパキスタンからの資金援助はほとんどなかったと思われる、その活動は基本的にボランティアで民族自決や選挙ボイコットを訴えるというものだった。

2-2 変化しつつあったメディア環境

ここで詳述はできないが、こうした若者たちの政治意識と分離主義の尖鋭化の背景には、カシミールにおける識字率⁵と教育水準の向上があった [Ganguly 1997: chapter 2]。JK州では試験のみを行う名目的な「ジャンムー・カシミール大学」が1948年に発足していたが、1969年あらためてジャンムー大学とカシミール大学がそれぞれジャンムーとスリナガルにキャンパスを持つ独立の教育機関として発足し [Rasool and Chopra 1986: 58]、若者たちの政治活動に新たな足場を与えていた⁶。

次に、こうした識字率・教育水準の向上がメディアの受容にどう反映されたかについて、コウルとシュミットが1980年代初頭に行ったアンケート調査のデータから考察してみたい [Koul and Schmidt 1983]⁷。この調査のサンプルは201名で、すべてカシミールに住むカシミール語ネイティブ・スピーカーであり⁸、表1と表2は彼らの間での日刊紙とラジオ番組 (ニュース) の受容状況を示している。なお当時のカシミールでは、会話はカシミール語、読み書きはウルドゥー語が主流であり、書き言葉としてのカシミール語は一部の文学関係者を除けば現在に至るまで一般化していない。

表1を見ると、大まかに若い年齢グループほど新聞をよく読んでいることがわかる。これを表2と比較すると、これが若者ほどニュースの摂取に熱心であるという一般傾向の反映のみではないことが推測される。なぜなら、表2からはラジオ⁹のニュース番組聴取に最も熱心なのは35～50歳の中年グループ (男性) であ

ることが読み取れるからである。全体として表1と表2から、1980年代初頭のカシミールでは教育水準・識字率の向上の結果、より若い世代ほど新聞＝活字メディアに親しむ傾向があったといえよう。

表1 カシミールにおける新聞読者の状況（1980年代初頭）（%）

	ウルドゥー紙 毎日読む (reading regularly)	ウルドゥー紙 たまに読む (reading occasionally)	ウルドゥー紙 読まない	英字紙 毎日読む	英字紙 たまに読む	英字紙 読まない
男性（18～34歳）	66.10	28.81	5.09	64.41	28.81	6.78
男性（35～50歳）	62.16	24.33	13.51	56.76	27.03	16.21
男性（51歳以上）	20.00	60.00	20.00	25.00	20.00	55.00
女性（18～34歳）	46.38	18.84	34.78	71.01	27.54	1.45
女性（35～50歳）	—	—	100.00	—	—	100.00
女性（51歳以上）	—	—	100.00	—	12.50	87.50

[Koul and Schmidt 1983: 42-43] の Table 25, 27 より作成

表2 カシミールにおけるラジオ聴取の状況（1980年代初頭）（%）

	カシミール語ニュー ス毎日聴く (listening regularly)	カシミール語 ニュースたまに聴く (listening occasionally)	カシミール語 ニュース聴かない	ウルドゥー語＝ ヒンディー語 ニュース 毎日聴く	ウルドゥー語＝ ヒンディー語 ニュース たまに聴く	ウルドゥー語＝ ヒンディー語 ニュース 聴かない
男性（18～34歳）	84.75	15.25	—	79.66	20.34	—
男性（35～50歳）	91.89	8.11	—	81.08	10.81	8.11
男性（51歳以上）	70.00	30.00	—	60.00	20.00	20.00
女性（18～34歳）	86.96	13.04	—	86.96	11.59	1.45
女性（35～50歳）	25.00	62.50	12.0	—	12.50	87.50
女性（51歳以上）	12.50	75.00	12.50	12.50	—	87.50

[Koul and Schmidt 1983: 44, 46] の Table 28, 31 より作成

それでは、1980年代初頭カシミールのニュース・メディアにおける活字メディアの比重が若者を中心に増加しつつあったとすれば、その活字メディアは当時のカシミールでどれほどの質・量を持っていたのか。インド政府の新聞登記官（Registrar of Newspapers for India）の年次報

告書『プレス・イン・インディア』(以下PII)を参照すると、大まかに次のようなことがわかる(なおPIIのデータは基本的に自己申告によるものであり、必ずしも正確なわけではない[Jeffrey 2010: 42]が、インド地方紙の発行部数についてはこれが唯一の資料である)。まず当州では、1970年代末までウルドゥー語週刊紙が活字メディアの大きなシェアを占めていた¹⁰。この頃までのJK州では住民の識字率が低く、新聞の需要においてもウルドゥー語紙を識者が週1回程度読む(あるいは周囲に読んで聞かせる)という形が一般的だったと推測される。カシミールにおける新聞読者の動向が1980年代初頭、若い世代を中心に変化したことはすでに述べたが、これに伴い、活字メディアにおけるウルドゥー語日刊紙のシェアが高まる。1980年代初頭のカシミールでは1957年創刊の老舗『アフターブ』と1969年創刊の『スリナガル・タイムス』の二大ウルドゥー語日刊紙が覇を競っていたが、市場には他にも多くのウルドゥー語日刊紙が出回っており、いずれも発行部数を伸ばす傾向にあった(表3)¹¹。これより少し前、1970年代のカシミール市場にどのような紙誌が出回っていたかについては、本稿の主役アナントナグ¹²についてのデータがあるが(表4)、スリナガル発行の主要ウルドゥー語紙の他に『タイムズ・オブ・インディア』や『インディアン・エクスプレス』といったインドの主要英字紙¹³が一定の読者を持っていたことが伺える。

いずれにせよこれらのデータからは、1980年代初頭当時のカシミールにおいて、新聞流通の絶対量はまだまだかなり少なかったものの、スリナガル発行のウルドゥー語日刊紙を中心に新聞を読む習慣が若い世代の間にひろがって行く姿が浮かんてくる。

なおカシミールではこの時期以降もしばらくウルドゥー語日刊紙の時代が続くが、1990年代を通じて最も流通したのは1988年創刊の『アル・サファ』だったことが知られている。2000年代に入るとカシミールにおける活字メディアの中心は英語に移行し、英字紙『グレーター・カシミール』がカシミール最大の日刊紙となり、今日に至っている。

表3 スリナガル発行主要紙の発行部数

	Aftab (1957, Urdu)	Srinagar Times (1969, Urdu)	Alsafa (1988, Urdu)	Greater Kashmir (1988, English)
1965	2,000			
1971	N.S. (4,000)	N.S. (2,000)		
1975	5,120	N.S. (3,500)		
1980	6,210	6,856		
1985	16,655	N.S.		
1990	blank	N.S.	13,633	
1995	記載なし	記載なし	記載なし	33,300
2002-3	12,312	記載なし	61,538	37,120
2006-7	33,148	記載なし	記載なし	91,248

N.S. = Not Supplied. 申告された数値が会計報告に裏打ちされていない場合も N.S. として記載。カッコ内数値は登記官による見積り。blank は新聞名の記載はあるのに発行部数の記載がない場合。出典：Press in India, 1966, 1972, 1976, 1981, 1986, 1991, 1996, 2002-2003, 2006-2007

表4 アナントナグで流通していた主な新聞（1970年代）

Aftab (daily, Urdu, Srinagar): 500 to 600
Srinagar Times (daily, Urdu, Srinagar): 400 to 500
Hamdard (daily, Urdu, Srinagar): 275 to 300
Indian Express (daily, English, Delhi): 100
Times of India (daily, English, Delhi): 50
Illustrated Weekly of India (weekly, English, Delhi): 50

出典：Census of India 1971, Jammu and Kashmir, Series 8, Part-VI-B, Special Survey Reports on Selected Towns: Anantnag, p. 197 (published in 1980).

2-3 カシミールにおける酒類販売の状況

他方、1980年代初頭の時点でカシミール・ムスリムの憂慮の種となっていたのが、カシミールにおける酒類販売の増加傾向だった。アブドゥッラー州政府がイスラム教の戒律を横目に酒類販売を容認したのは、それが重要な税収源だったからだった。ジャンムーの知識人パールラージ・プリーによれば、1981年当時「[JK州における] 酒類の消費が増加するに従い、地酒〔country liquor〕他酒類の取引における独占は自動的に州政府の税収増加をもたらした。酒類の非合法取引を効果的に取り締まることができれば、酒類取引からの税収は州政府にとってより大きな財源となるだろう」[Puri 1981]。当時JK州政府は一部の酒屋（depot）経営および酒類業者へのライセンス発行制度によって酒類販売を独占的に統括していた。JK州における州物品税（state excise tax、主に酒類を対象とするが、麻薬関連品をも対象とする）からの税収は例えば1981-

82年度で1億4640万ルピー（全税収の24.29%）であり[Yasmin 2004: 149]、当時のJK州における酒類販売からの税収の重要性がうかがわれる。

JK州におけるこうした傾向はインド全国紙の記者たちも十分に承知するところだった。『タイムズ・オブ・インディア』によれば、「シェイク〔・アブドゥッラー〕政権はあきらかにジレンマにあった。禁酒政策への意思はあるものの、身入りの多い旅行業および酒類販売からの税収益のため、州政府は禁酒政策を州内、とくにカシミール渓谷で本格的に実施するわけにはいかなかった。禁酒論に油を注ぐかのように、酒類からの税収は毎年増え続ける傾向にある」[Times of India 1982: March 16]。アナントナグで禁酒運動が起きた理由の一端は、カシミールにおけるこうした酒類販売の状況にあったと考えられる。

3 禁酒運動の概要

次に、1982年に南カシミールの中心都市アナントナグで起きた禁酒運動（Anti-liquor Movement）のあらましを、当時の新聞記事とインタビューから得た情報によって再構成してみたい¹⁴。

1982年3月初め、分離主義団体ピープルズ・リーグの若者たちが、アナントナグの中心部にある酒屋に出入りする人々を対象に飲酒ボイコット運動を始めた。これは酒屋へ入る人々に対しては飲酒をやめるよう説得し、酒屋から出てくる人々に対しては持ち物検査を行い、酒瓶が見つかった場合はその場でこれを路面にたたきつけて壊す、という運動だった。この運動の首謀者は、当時ピープルズ・リーグのリーダーで、1980年代末～90年代初頭にカリスマ的分離主義者として有名になるシャビール・シャー（Shabir Ahmad Shah, 1952～）だったことが知られている[Srinagar Times 1982: March 17]。この運動の開始日時については3月3日説と5日説があるが¹⁵、いずれにせよこの運動が警察の取り締まりと報道の対象になったのは3月8日以降のことである。

3月8日の朝、それまで数日間ピープルズ・リーグの若者たちによって閉店状態に追い込まれていた町の酒屋2軒が、徴税官と警官隊の手で開店させられた。これを受けて若者たちと警官隊のあいだで投石対警棒の諍いとなり、アナントナグの町はストライキに入った。この騒乱状態は数日間続いたが、とくに3月9日、これらの酒屋が暴徒によって略

奪・焼き討ちされたのが事件のピークだった。8日から10日までの騒乱で数十名が負傷し、数十名が逮捕され、警備隊（Central Reserved Police Force）が動員された¹⁶。3月11日、ストの続くアナントナグの中心部ラール・チョウクでピープルズ・リーグ、自由戦線、イスラム党のリーダーたちが合同で集会を開き、JK州における酒類の販売禁止を訴えた。この直後、これらの団体の代表団が地方行政官（Deputy Commissioner）と会合を持ち、アナントナグにおける酒類販売禁止の合意をとりつけた後、ストが解かれた。

3月12日、ストは前日解かれていたにもかかわらず、カシミーリー・パンディット（カシミールのヒンドゥー教徒）の店々のみがアナントナグでストに入った。9日にはアナントナグの個人経営酒店すべて（3軒）¹⁷が略奪にあったわけだが、これらの店の経営者がすべてパンディットだったことがこの日のストにつながった。パンディットたちは町の警護不備を政府に抗議し、これにあわせて、従業員にパンディットの多い諸銀行も機能停止に陥った。

3月15日夕、シャビール・シャーをはじめ投獄されていたピープルズ・リーグのリーダーたちが釈放され、アナントナグの町は彼らの釈放を歓迎する声で沸いた。これらピープルズ・リーグのリーダーたちはこの直後、禁酒運動を広めるべくスリナガルへ赴き、そこで18日に再逮捕された。一方、カシミールの酒類販売者協会（Kashmir Liquor Dealers' Association）は17日、毎週金曜日（イスラム教の祝日）に酒屋とバーを閉店すると発表した。

この禁酒運動をめぐる各紙の報道はここまでだったが、アナントナグにおける禁酒運動はその後ピープルズ・リーグの手を離れ、町の市民フォーラム（citizens' forum）によって担われることになった（インタビューより¹⁸）。この市民フォーラムと行政の話し合いによって、アナントナグ町の酒屋はすべて町外へ移設することが決定され、実行された。

4 事件の報道における偏り

カシミールにおけるこの禁酒運動をめぐる見解と報道は、ヒンドゥー寄りのインド全国紙とムスリム寄りのカシミール地方紙の間でおおきな食い違いをみせた。以下ではこの事件をめぐる両者の言説の特徴を探ってみたい。

4-1 インド全国紙

インド全国紙の代表格『タイムズ・オブ・インディア』（ボンベイ版）と『インディアン・エクスプレス』（ニューデリー版）がこの事件を初めて報道したのは3月10日のことで、いずれの記事も首謀団体ピープルズ・リーグに言及する際「親パキスタン」（pro-Pakistan）の形容詞を付しているのが目を引く¹⁹。その後両紙はそれぞれ3月16日と18日にこの事件に関する詳細なレポートを掲載した²⁰。これらのレポートの主な論点は以下の通り。

1 いずれのレポートもこの事件を反インド的（anti-national）、コミューナル、反ヒンドゥー的と見なし、とくに3月12日のカシミリー・パンディットによる抗議ストに注目する。2 カシミール政府の対応について、それがマイノリティー＝ヒンドゥー教徒への暴力を黙認した点において糾弾する。3 事件の真の動機が分離主義のプロパガンダにあるとし、その分離主義の後ろ盾としてとくにイスラム党を想定する。「ある消息筋によれば、原理主義者のイスラム党がこのアジテーションの黒幕である可能性は否定できない [Times of India 1982: March 16]。」「この禁酒運動がイスラム党とその子団体（splinter groups）であるピープルズ・リーグと自由戦線によって、彼らの政治目的のために利用されたことは公然の秘密である [Indian Express 1982: March 18]」。実際には前述のように、イスラム党の子団体はイスラム学生組織のみであり、ピープルズ・リーグおよび自由戦線はいずれもイスラム党とは独立の団体。

また、『タイムズ』のレポートは「なぜピープルズ・リーグのようなとるに足りない（fringe）団体がこれほどの影響力を発揮することが出来たのか」について議論し、『エクスプレス』3月19日付の社説は「彼ら〔拓註：分離主義者たち〕の運動が少数派の域を出ることは決してないだろうが、それでもこうした騒乱を引き起こす彼らの力をあなどるべきではない」と結論づけている。つまり両紙の議論のもう一つの特徴は、基本的にカシミールの分離主義はカシミール住民のマジョリティーとは無縁であるという暗黙の前提にある。

4-2 カシミール地方紙

スリナガル発行のウルドゥー語日刊紙『スリナガル・タイムス』²¹は3月9日以降、連日のようにこの禁酒運動について報道し論評を加えた

が、その論調は一貫して禁酒運動の若者たちに同情的なものだった。その主な論点は以下の通り。

1 この禁酒運動の非政治性・市民性・非暴力性を強調する。非政治性・市民性については、3月14日付の自由戦線アナントナーグ地区代表の談話（見出しは「禁酒運動に政治的意図なし」）にも明らかなし、編集委員によると思われる無署名コラム「アナントナーグ見聞」（3月10日付）の「これは野党国民会議派リーダーによる政権転覆の謀略でもなければ、与党ナショナル・コンフェレンスのボスによる仰々しい言い訳でもない。町の若者たちによる、飲酒に反対する全市民のための運動（hamah-gīr mohim）なのである」という言い方にもよく表れている。非暴力性についても同コラムや3月23日付の社説などで、この禁酒運動の本来の（初期数日間の）非暴力性・平和性が強調された。女性の運動参加への言及も運動の市民性・非暴力性の強調に一役買っている。3月10日付の記事では、9日のデモに女性たちも参加し、警官隊にガラス片や酒瓶を投げつけながら「たとえ死んでも酒の取引はさせない」（Hum jān dēngē lēkin sharāb nahīn bēchnē dēngē）のスローガンを叫んだと報道された。2 カシミール政府の対応については、禁酒を求める有志の若者たちに警察が暴力をふるった点を糾弾する。3 運動の宗教性・コミューナル性を否定する。これは地区行政官（Deputy Commissioner）の談話（見出しは「酒屋が攻撃されたのは、それが非ムスリムの店だったからではない！」）という形でも掲載されたし（3月19日付）、3月23日付社説「酒飲みと酒類販売業」の冒頭「酒飲みには多様な素性或宗派の者がいるものである。同様に、酒類販売業はかならずしも特定の宗教や国と結びつきはしない」にも明らかなだった。さらに、自由戦線の地区代表は彼らが過去にムスリム経営のバーを閉店させた事例を挙げて禁酒運動のコミューナル性を否定した（3月14日付）。3月17日付の匿名記者執筆Q&A欄も「アナントナーグではとくにヒンドゥー経営の酒屋が禁酒運動の標的になったというのは本当ですか？」の問いに対して「完全な間違いです。我々の知るところでは、酒屋を襲った若者たちの中にはカシミーリー・パンディットも数人混じっていました。そしてこの禁酒運動をリードしたのはまさにこれらの若者たちだったのです」と答えている。

5 報道言説の陰で

こうした報道における偏りが生じる背景には、当時の報道では言説化されにくかった、もしくはマイナーな問題として脇へ退けられたいくつかの要素・文脈（およびそこにおけるズレ）が存在した。以下ではこれらについて検討し、上記報道内容の読解の一助としたい。

5-1 イスラム党の扱いをめぐる

4-1 でみたその扱いからもわかるように、インド全国紙にとってのイスラム党（Jama'at-e Islami）は当時、インドの脅威としての「イスラム原理主義」の象徴的存在だった。インドではスリナガル暴動（1980年7月）やモラダバード暴動（同年8月）の報道を通じてイスラム党の象徴化が進められたが、これらの暴動をめぐる報道言説の特徴は、暴動へのイスラム党の直接の関与の確証がないにもかかわらず、結論としてイスラム党の脅威が論じられる点にあった²²。事実に基づくというよりむしろ象徴レベルの物語であるこうしたイスラム党脅威論は、結果的にムスリムへの偏見を助長し、インドのコミュナル関係を悪化させた。1980～81年のこうした報道言説のあり方についてインドのあるジャーナリストは、当時ビジネス化しつつあったインド日刊紙による販売促進目的のセンセーショナルリズムが事態のコミュナル化を助長したと指摘している[Banerjee 1992: 388]。そして、1982年のアナントナグ禁酒運動をめぐるインド全国紙の報道言説も、やはりこうしたイスラム党をめぐるシンドロームの一部として存在した。

他方、JK州におけるイスラム党にはまた別のコンテキストがあった。イスラム党の結成は1941年ラホールでのことだったが、1947年の印パ分離独立とJK領有権問題の発生を受け、インド側JK州のイスラム党は1952年、インドのイスラム党（Jama'at-e Islami Hind）から独立した団体（Jama'at-e Islami J&K）となった[Bisati 1997]。JK州のイスラム党は一貫してカシミールが国際的な未解決問題であるという見解をとり続け、1950～60年代には国民投票戦線を支持した。1969年のパンチャーヤット選挙から選挙に参加し始めたJK州のイスラム党はしかし、1970年代以降のカシミール政治においてシェイク・アブドゥッラーのNCと鋭く対立することになる。

なぜなら、両者はイデオロギー的に重なりあう面が多く、支持層が競合していたからである。第一に、両者の支持の大きな源泉の一つがカシミール分離主義にあった点が挙げられる。この点では、インド憲法に則った選挙政治に参加した時点で両者とも純粋な分離主義からは脱落していたわけだが、1975年にインド中央政府とカシミール合意に及んだシェイク・アブドゥッラーとそのNCはもはやイスラム党ほどあからさまな分離主義的言説に訴えることはできず、分が悪かった。第二に、さらに重要な問題として、両者の支持の源泉がともにイスラム教護教の姿勢・敬虔さにあった点が挙げられる。アブドゥッラーのこうした宗教色はいわゆる「インド独立闘争のヒーローとしてのセキュラーなアブドゥッラー」像の陰になり、カシミールの外では歴史的にあまり強調されて来なかったが、地元カシミールにおけるアブドゥッラーはつねに首都スリナガルの中心的イスラム教施設からその政治メッセージを発信する「敬虔な」カリスマの側面を持っていた²³。同時にアブドゥッラーは、JK州のワクフ信託 (Auqaf Trust) をNCの管轄下に置くことにより、基本的に州内すべてのイスラム教施設を自ら管理してもいた。1982年禁酒運動の際、「アブドゥッラーは州首相であるだけでなく、ワクフ信託の代表というイスラム教徒として責任ある立場にあるのだから、イスラム教で禁じられている酒類販売を率先して禁止すべきだ」という主張があったのはこのためである [Srinagar Times 1982: March 12]。表向き・全インドレベルではインド流セキュラリズムを標榜しながら、地元カシミールでは敬虔なムスリム・リーダーとして人気を集めていたアブドゥッラーにとって、いまや政界にも進出し始めたイスラム党の敬虔なイメージは大きな潜在的脅威だった。こうした事情から1975年、州政権の座に返り咲いたアブドゥッラーは非常事態下、さっそくイスラム党経営下の諸学校 (darasgāh) をコミュニナリズムの温床と呼んで閉鎖させた [Verma 1994: 59]。

まとめると、地元カシミールのコンテキストにおけるアブドゥッラーのNCとJKイスラム党は、当時どちらがカシミールのムスリムとイスラム教を代表するかをめぐって対立していた。そしてこの対立におけるJKイスラム党とは、分離主義の前衛団体というよりは、实际的な利益を求めて選挙活動にまで乗り出す地元の宗教的圧力団体だった。これに対し、インド全国紙の報道におけるこの対立はアブドゥッラーがセキュラー

(善玉)、イスラム党がイスラム原理主義(悪玉)という構図で喧伝された。その結果、実際にはむしろ地域におけるイスラム教護教の主導権をめぐって行われていたアブドゥッラー政権によるJKイスラム党の弾圧が、全インドレベルではこのセキュラー／イスラム原理主義の構図により正当化されることとなった。全インドレベルにおいてJK州政府によるJKイスラム党の弾圧が正当化されたことは、地元カシミールのレベルではその後むしろ「インドの政府・メディアと内通した州政府によって弾圧される者こそ我々の代弁者」という逆の象徴化の論理によって、JKイスラム党の分離主義ヒーロー化に貢献することになった。

5-2 カシミーリー・パンディットの苦境

一方、インド全国紙によるこの禁酒運動の報道において「イスラム党＝原理主義」と並ぶカシミール・コミュニズムの象徴的要素となった「攻撃にさらされる少数派ヒンドゥー」すなわちカシミーリー・パンディットたちの実情はどのようなものだったのだろうか。

1990年に始まるその難民化(カシミール脱出)以前でさえ、カシミーリー・パンディット(＝カシミールのヒンドゥー教徒)はカシミール人口の4%未満を占めるにすぎない極小マイノリティーだった。歴史的にこのコミュニティは各時代の宮廷言語に長じた官僚集団の性格を有していたが、インド独立後の民主主義体制において彼らの官僚職独占は不可能となり、方向転換を余儀なくされていた。カシミーリー・パンディットの代表団体であるASKPC(All State Kashmiri Pandit Conference)のリーダーは次のように語る。

カシミーリー・パンディットは永らく政府官僚職に自己同一化してきました。が、彼らも1980年代には方向転換に踏み切り、ビジネスの分野に乗り出しました。医薬品を扱う者もいれば小規模産業を起こす者もいるという具合で、いずれの場合も彼らは政府のアドバイスを得てこれらのビジネスに乗り出したのです。しかしこれが反社会分子の機嫌を損ねました——いまやカシミーリー・パンディットはビジネスの分野まで席卷しようとしている、というわけです。そんなわけで彼らは酒類販売業者を攻撃ターゲットに選んだのです。(H・N・チャッタ〔Chatta〕へのインタビュー、2007年8月31

日、於ジャンムー)

パンディット・コミュニティと酒類販売業の結び付きの由来は必ずしも明らかではないが、カシミール人ジャーナリストのザッファル・メーラーは1985年、このコミュニティが「カシミールの酒類販売業をほぼ独占している」と記している [Kashmir Times 1985: November 26]。イスラム教で禁じられている酒類の取引はムスリムにとって少なくとも表立った従事は難しく、パンディットの独占へと至った可能性が考えられる。いずれにせよ、1980年代初頭のカシミールにおいて酒類販売業は(2-3でみた通り)上り調子にあり、そのパンディット経営者たちは、かつての官僚エリート・アイデンティティーをかなぐり捨てて世俗のビジネスに乗り出した見返りをようやく実感しつつあったはずである。そこへ起きたのが禁酒運動による突然の店舗破壊・ビジネス閉鎖だった。

破壊行為の被害者となったパンディット経営者たちのショックは、パンディット・コミュニティ全体によって共有されたものと思われる。アナンツナグ地元パンディットによる3月12日の抗議デモについてはすでに触れたが、その後ASKPCはカシミール各地でこの事件に抗議する行動委員会 (Action Committee) を組織し (チャッタへのインタビュー)、さらにその代表団が4月6日、ジャンムーを訪れていたインディラ・ガーンディー首相と面会し、州政府の適切な対応を促すよう要請した [Kashmir Times 1982: April 22, 投書欄]。4月19日には北インド移住組カシミリー・パンディット²⁴の代表組織の一つデリー・カシミール人協会 (Kashmiri Samiti, Delhi) までがこの禁酒運動事件他での「カシミールにおけるマイノリティーへの攻撃」を憂慮する声明を発表した [Kashmir Times 1982: April 20]。

とはいえ、当時のパンディット・コミュニティは未だ集団難民化・カシミール脱出という選択肢までは考えていなかった。アナンツナグにおける店舗破壊行為とその正当化がムスリム側のマジョリタリアンな無神経さを表していることに疑いの余地はなかったが、将来も極小マイノリティーとしてカシミールで生きて行くうえで、当時のパンディットたちはムスリム側のマジョリタリアニズムを直接糾弾できる立場にはなかった。3月12日の抗議集会におけるアピールやASKPCのインド首相への要請が、いずれも州政府・行政の対応不備のみを糾弾の対象として

いたのはこのためである。

6 カシミールをめぐるセキュラー言説の難しさ

6-1 セキュラー＝コミュニカル言説のトリック

この禁酒運動をめぐる各紙報道の大きな特徴は、いずれの場合も論旨正当化の根拠を自らのセキュラーな立場に求めている点である。これは「イスラム党の原理主義」と対比させて自らの立場をセキュラーと規定・正当化し、そのうえでカシミールにおける「少数派ヒンドゥー」を擁護し「一部過激派」としての分離主義者を糾弾するインド全国紙においても、禁酒運動をセキュラーな市民運動と規定・正当化してこれに自己同一化し、そのうえでマイノリティーがこうむった被害を実質的に黙殺してしまうカシミール地方紙においても同じことだった。こうした自己正当化セキュラー言説、とくに当時この傾向が顕著だった『タイムズ・オブ・インディア』編集長ギリラル・ジェイン (Girilal Jain) のそれについて、メディア批評家のイクバル・マスードは次のように述べている。

私の思うところでは、ギリラル・ジェイン氏の論説は危険なものだが、しかし——ここが重要な点だが——この論説は何百万人もの新聞読者にとってはどう見ても筋が通っていて、理性的であり、セキュラーなものとして受け入れられるものなのである。こうした論説の危険性はまさに、それが『オーガナイザー』〔拓註：ヒンドゥー至上主義団体RSSの機関紙〕のような〔拓註：明らかに偏った〕新聞に載っているわけではない点にある。セキュラーな新聞がコミュニズムを助長するこうした動きは近年の現象であり、とるに足りないマイナー新聞のこれ見よがしのコミュニズムより、よほど注意を要する。〔Masud 1992: 403〕

こうしたインド新聞メディアの「セキュラーな外観を伴うコミュニカルな」言説（本稿ではこれを仮に「セキュラー＝コミュニカルな」言説と呼ぶことにする）はもちろん言説空間にとどまらず、実際の政治状況を動かした。1980年代初頭のインド全国紙のセキュラー＝コミュニカルな言説はムスリムへの偏見を助長し、カシミールにおいて不必要なまでの分離

主義者の逮捕・拘束を促したうえ、逆にこうした「逆境に屈しない」分離主義者たちをヒーロー視する土壌をカシミールに生んだ。同時期のカシミール地元紙におけるセキュラー＝コミユナルな言説は、一方でこの禁酒運動をパキスタンや「原理主義」と結びつけるインド全国紙のセキュラー＝コミユナル言説を論駁する機能を果たしたのも事実だが、基本的には分離主義的若者たちの行き過ぎを看過する一助となったのみならず、行政までがこの禁酒運動をセキュラーと規定する事態につながり、マイノリティー＝パンディット・コミュニティの感情を無視する結果につながった。

6-2 「セキュラーな市民」という主体の問題

以上のように、マジョリティー・コミュニティという存在は半ば無意識のコミユナリズムを持ち合わせることが多い。そして、民主政治においてその主体となる「セキュラーな市民」の内実は、多くの場合こうしたマジョリティー・コミュニティであらざるを得ない。歴史的に、全インドレベルにおける「セキュラーな市民」の内実はヒンドゥー・マジョリティーであり、カシミール地方レベルにおけるそれはムスリム・マジョリティーであり続けた。

カシミールをめぐるひとつの問題は、インドの政府・国民・メディアがカシミールのムスリム・マジョリティーをいかに「セキュラーな市民」とみなすことができるか、いかにこのカテゴリーに含めることができるかという点にあると思われる。既にみたように、シェイク・アブドゥッラー存命中は、現実にはムスリム・マジョリティー色を色濃く持っていたこのカリスマ的リーダーをインド側が「セキュラー」と読み替える、もしくは読み違えることによって、カシミールのムスリム・マジョリティーをインド版「セキュラーな市民」へ取り込むことが可能となっていた。そしてカシミールの分離主義については、インド側はこれをカシミール・マジョリティーの現実と受けとめることはできず、つねにこれをごく少数の過激分子と見做そうと試みたわけだが、現実には本稿でみた通り、分離主義の若者たちが唱導した禁酒運動と彼らが代弁したモラル意識は女性を含むカシミールのムスリム社会でひろく受け入れられ、共有されていた。

問題は、アブドゥッラー没後のインドがこうしたカシミールのムスリ

ム・マジョリティーを「セキュラーな市民」に含めるチャンネルを失ったことだった。1982年の時点ではそれでも、カシミールのムスリム・マジョリティーとその新聞メディアはインドとの紐帯を失ってはいなかった。『スリナガル・タイムス』1982年3月23日付社説はカシミールがヒンドゥー・ムスリム融和のセキュラーな伝統を持つことを強調し、「この禁酒運動にコミュニザリズムのレッテルを張ろうと試みる者は、国の敵である」と論じている。ここでいう国(qaum)はむしろカシミールではなくインドを指している。しかし、州政府があからさまにインド中央政府の傀儡と化し、分離主義者たちが大した理由もなく逮捕・拘束される状況が続く中、インドの枠内でのカシミールの文化的独自性を鋭く論じるのが持ち味だった『スリナガル・タイムス』は次第に覇気と人気を失って行く。こうして時代は1980年代末のカシミール分離主義ゲリラ紛争へと移行して行ったのだった。

註

- 1 本稿における「カシミール」は、インド側JK州のカシミール地方を指す。JK州(2011年総人口約1,255万人)は三つの地域に大別され、その人口の内訳は、イスラム教徒(主にスンニ派)が95%以上を占めるカシミール地方(総人口比55.1%)、約3分の2がヒンドゥー教徒で約3分の1がイスラム教徒のジャンムー地方(同42.6%)、半数強を仏教徒、半数弱をイスラム教徒(主にシアー派)が占めるラダック地方(同2.3%)となっている(2011年センサスより)。
- 2 その結成当初の主力メンバーは、のち2000年にゲリラ組織ヒズブル・ムジャヒディーンとインド政府の対話交渉役を務めることになるファズル・ウル・ハック・クレーシー(Fazl-ul-Haque Qureshi)、のち国外へ逃亡するナジール・アフマド・ワニー(Nazir Ahmad Wani)、イスラム党とも縁の深かったファルーク・レフマーニー(Farooq Rehmani)など。彼らの多くは1960年代末～70年代初頭、ユース・リーグ(Youth League)のメンバーとして当時の分離主義学生運動を組織していた。ユース・リーグはアブドゥッラーの分離主義放棄のさい分裂し、反アブドゥッラー＝分離主義固持派が結成したヤングメンズ・リーグ(Youngmen's League)が数年後ピープルズ・リーグの母体となった[Hussain n.d.]。1960年代半ばから70年代初頭にかけてユース・リーグと緩やかな連携関係にあった分離主義団体として、第二次印パ戦争の際に組織された親パ・カシミール人集団である「マスターズ・セル」(Masters Cell)や、国民投票戦線と関係を持ち、1971年1月スリナガルの銀行強盗事件で有名になった分離主義ゲリラ組織「アル・ファタ」(Al-Fatah)がある[Swami 2007]。なおNLF(National Liberation Front、1965年結成)を前身とするJKLF(Jammu and Kashmir Liberation Front、1977年結成)がインド側カシミールで本格的に活動を開始するのは1988年のことで、それまでのその活動は主にパキスタン、パキスタン側JK、イギリスに限定されていた[Sahni 1999]。
- 3 1960～70年代における国民投票戦線は一般にウルドゥー語名「マハーゼ・ラエシュマー

- リー」によって親しまれており、自由戦線＝マハーゼ・アーザーディーの「マハーズ」(戦線)は国民投票戦線本来の分離主義を受け継ぐのだという意味合いで冠されたものと思われる。
- 4 イスラム学生組織の前身は学生イスラム組織 (Student Islamic Organization, 1974年結成、以下SIO)で、その中心メンバーはのちにイスラム学生組織の中心となるタジャムル・イスラーム (Tajamul Islam)およびのちにロンドンで世界カシミール自由運動 (World Kashmir Freedom Movement)を創立するアユーブ・タークル (Ayyub Thakur)という2人のイスラム党シンパだった [Islam 2005]。SIO 創立メンバーの一人は、アル・ファタにもかかわり、1983年からは自由戦線のリーダーとなるアザム・インキラビー (Azam Inqilabi)。
 - 5 JK 州人口全体の識字率は、1961年の11.03 % から1981年の26.67 % へと増加している [Ganguly 1997: 32]。
 - 6 註4 で言及したSIO は主にカシミール大学の学生寮を拠点に活動したことが知られている [Islam 2005]。
 - 7 [Koul and Schmidt 1983]には調査日時の記載がないけれども、記述内容から考えて調査日時が出版年の1983年を大きくさかのぼる可能性は低く、少なくとも1980年以前にさかのぼることはないと思われる。
 - 8 サンプルの201名はカシミールのスリナガル (Srinagar)、アナントナグ (Anantnag)、プルワマ (Pulwama)、バラムッラ (Baramulla)の4地区(district)から選ばれ、うち166名は高校 (higher secondary)以上の学歴がある。職業的には、サンプルの49%がカレッジ・大学の学生、21%が教師、11%が農民、6 % が商人、4 % が官僚を含むサラリーマン。宗教的にはムスリムが107名、ヒンドゥーが94名。サンプルの大半が高学歴の若者であり、その偏りは否めないが、しかしサンプルには21名の35歳以上ムスリム男性 (3～4割が無学歴)、6名の35歳以上ムスリム女性 (全員無学歴)、10名の35歳以上ヒンドゥー女性 (8名が無学歴)なども含まれており、したがってこの調査から一応の世代間・性別の比較は成立する。
 - 9 JK 州では1947年12月、第一次印パ戦争の最中にラジオ放送が始まった。このような早い時期にラジオ放送が始まった理由は、戦争におけるパキスタン側のプロパガンダに対抗するためラジオ放送を戦略的に使用する必要があったことだった [Handoo 1998]。なお、やはりパキスタン側からの放送への対抗上、スリナガルにT V局が開設されJK 州でT V放送が始まったのは1973年のことだった。しかし、全インドレベルで衛星を使ったT V放送が本格化するのには1982年のことで、それ以前のJK 州においてT V視聴がポピュラーだったとは考えにくい [Mankekar 2000, Ninan 1995]。
 - 10 JK 州ではカシミール地方の首都スリナガルと並んでジャンムー地方の首都ジャンムーでも新聞発行が盛んだったが、住民の主体がヒンドゥー教徒のジャンムーでも、1980年代末まで活字メディアの中心はウルドゥー語紙にあった。なお1990年代半ばまでJK 州唯一のクオリティー英字紙としての地位を保った『カシミール・タイムス』はジャンムー発行の日刊紙 (1955年創刊)。
 - 11 1980年代初頭のカシミールで流通していた主なウルドゥー語日刊紙 (スリナガル発行)には他に『Aina』(1980年の発行部数5,116)、『Hamdard』(同3,483)、『Khidmat』(同1,650)、『Wullar』(同2,870)、『Roshni』(同3,400)などがある (発行部数はPII 1981より)。
 - 12 1981年センサスによれば、アナントナグ町の人口は1971年に51,351、1981年に70,286だった。

- 13 英字紙を含むインド日刊紙の発行部数は1970年代末から80年代初頭にかけて大きく伸びたが、その背景にはいくつかの要因があった。第一に1977年ジャナタ政権成立後、非常事態期の報道管制が解かれ、これが識字率の向上とも相まって人々のニュース需要を引き上げた。第二に、この時期にオフセット印刷と活字タイプのコンピューター化が導入され、技術面で一大革新があった。第三に、ちょうどこのころ新聞広告のビジネス価値が認識され始め、新聞運営がビジネスとしてとらえられるようになった [Jeffrey 2010, Kohli-Khandekar 2010]。1991年市場開放にともなうビジネス化の時期ほど急激な伸長はなかったものの、1970年代末～80年代初頭の日刊紙ビジネス化と発行部数の伸長は、当時のインド人の政治意識の尖鋭化とその質の変化に寄与したと思われる。
- 14 新聞はSrinagar Times (Srinagar 発行、ウルドゥー語)、Kashmir Times (Jammu 発行、英語)、Times of India (Bombay 発行、英語)、Indian Express (New Delhi 発行、英語)の4紙を参照した。
- 15 [Kashmir Times 1982: March 9] (情報源:UNI)によればこの運動の開始日は5日だが、この運動の主導者の1人ムクタル・アフマド・ソフィ (Mukhtar Ahmad Sofi、当時ピープルズ・リーグのアナントナグ地区プレジデント)によれば、この運動は3日の夕方開始された(ソフィへのインタビュー、2007年8月21日、於スリナガル)。両者は、この運動の最初の3日間が警察の介入なく過ぎたという点に関しては一致するようだ(この点に関しては、被害に遭った酒屋のマネージャーの証言もある。Indian Express, March 18, 1982)。ポイントは5日がイスラム教徒にとっては重要な金曜日だった点であり、ソフィの記憶ではこの日は運動の3日目、彼らはこの日の夕方逮捕された。
- 16 [Times of India 1982: March 10] (情報源:PTI)によれば、8～9日の負傷者は約65名、逮捕者は約45名。9日には催涙ガス弾使用のほか、威嚇のための発砲もあった。
- 17 当時アナントナグの酒屋は、町はずれにあった政府運営店(depot)を入れて計4店あった。9日にはこの政府運営店も襲撃されたものとみられる。
- 18 ムクタル・アフマド・ソフィへのインタビュー(2007年8月21日、於スリナガル)、および1982年当時アナントナグのヒンドゥー教徒を代表する団体だった運営委員会(Anantnag Prabandhak Committee)でプレジデントを務めていたH・L・ジャッド(Harji Lal Jad)へのインタビュー(2010年12月25日、於ジャンムー)より。
- 19 とくに『インディアン・エクスプレス』3月10日付の記事は一面左肩トップの扱いで、見出しも「Pro-Pakistan party men turn violent in Kashmir town」と、「親パキスタン」と「暴力」の記号を結びつけた典型例となっている。
- 20 『タイムズ』3月16日付9面のレポートの筆者はこの記事取材のためにカシミールに特派されたV.K. Dethe。他方、『エクスプレス』(ニューデリー版)のレポート(無署名)は3月18日付5面に掲載された。
- 21 なお、1980年代初頭のカシミールで『スリナガル・タイムス』と並ぶ発行部数を誇った『アフターブ』(Aftab)は当時やや保守化しており、この禁酒運動に関してもアクティブな報道・コメントは少なかったため、本稿ではこれら二大地方紙のうち『スリナガル・タイムス』のみをカシミール地方紙の代表としてとり上げる。
- 22 とくに当時発行部数を増やしていた『タイムズ・オブ・インディア』紙(ボンベイ版)の1980年7月30日(スリナガル暴動について)と8月17日(モラダバード暴動について)の社説を参照。
- 23 1930年代、若きアブドゥッラーとそのムスリム・コンフェレンス(1939年からNC)の根拠地は

主にスリナガルのパッタル・マスジッドだった [Rai 2004: chapter 4-iii]。その後アブドゥッラーはその根拠地を有名な預言者の伝説的遺髪を収容するハズラトバル廟 (スリナガル、ダル湖西岸)へ移し、「カシミールのメッカ」とも言われるこの巡礼の地と自らのアイデンティティーを結びつけた [Khan 1989]。

- 24 カシミリー・パンディットの一部は18世紀初頭から北インド各地の宮廷へ移住・出仕を始めた。インド独立の時期までに北インドへ移住したこれらのパンディットはカシミール語を話さず北インドで独自のコミュニティを形成しており、カシミール地元のパンディットと区別して考えられることが多い。インド初代首相ネルーはこの北インド移住組パンディット・コミュニティの出身。

参考文献

- 伊豆山真理、2011、「カシミール問題とインド・パキスタン関係ー領域支配・レファレンダム・自治ー」、山影進、広瀬崇子(編)『南部アジア』、ミネルヴァ書房、36-52頁。
- 伊藤融、2007、「『カシミール』をめぐるアイデンティティと安全保障観の変容」、『国際安全保障』、35-2、77-95頁。
- 堀本武功、1997、『インド現代政治』、刀水書房。
- Banerjee, Subrata, 1992, “Communalism as a Commodity in Media Industry”, in Pramod Kumar (ed.), *Towards Understanding Communalism*, Chandigarh: Centre for Research in Rural and Industrial Development, pp. 382-396.
- Bhargava, Rajeev, 1998, “Introduction”, in Bhargava (ed.), *Secularism and Its Critics*, New Delhi: Oxford University Press, pp. 1-28.
- Bisati, Afroz Ahmad, 1997, *Religio-Political Role of the Jama'at-i-Islami in Jammu and Kashmir*, M. Phil. Thesis, Shah-i-Hamadan Institute of Islamic Studies, University of Kashmir.
- Ganguly, Sumit, 1997, *The Crisis in Kashmir: Portents of War, Hopes of Peace*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Handoo, Ashok, 1998, “Evolution of Broadcasting in J&K”, in *Kashmir Today*, Golden Jubilee Number, pp. 233-236.
- Hussain, Altaf, n.d. (circa. 1994), *Shabir Shah: A Living Legend in Kashmir History*, Srinagar: Noble Publishing House.
- Islam, Tajamul, 2005, “Hama-tan Mujāhid aur Hama-waqt Muztarib Shaqs” [Total Warrior and Always Busy Person] [in Urdu], in Jauhar Quddusi and Sheen Meem Ahmad (eds.), *Dr. Muhammad Ayyub Thakur: Life with a Mission, Monthly Takbeer Special Issue*, Vol. 18, No. 1-4, April, pp. 162-167.
- Jaffrelot, Christophe, 1999, *The Hindu Nationalist Movement and Indian Politics: 1925 to the 1990s*, New Delhi: Penguin Books.
- Jeffrey, Robin, 2010, *India's Newspaper Revolution: Capitalism, Politics and the Indian-language Press (Third Edition)*, New Delhi: Oxford University Press.
- Khan, Mohammad Ishaq, 1989, “The Significance of the Dargah of Hazratbal in the Socio-Religious and Political Life of Kashmiri Muslims”, in Christian W. Troll (ed.), *Muslim Shrines in India: Their*

- Character, History and Significance*, New Delhi: Oxford University Press, pp. 269-286.
- Kohli-Khandekar, Vanita, 2010, *The Indian Media Business (Third Edition)*, New Delhi: Response Books.
- Koul, Omkar Nath and Ruth Laila Schmidt, 1983, *Kashmiri: A Sociolinguistic Survey*, Patiala: Indian Institute of Language Studies.
- Mankekar, Purnima, 2000, *Screening Culture, Viewing Politics: Television, Womanhood and Nation in Modern India*, New Delhi: Oxford University Press.
- Masud, Iqbal, 1992, "Print Media and Communalism", in Pramod Kumar (ed.), *Towards Understanding Communalism*, Chandigarh: Centre for Research in Rural and Industrial Development, pp. 397-407.
- Ninan, Sevanti, 1995, *Through the Magic Window: Television and Change in India*, New Delhi: Penguin Books.
- Puri, Balraj, 1981, "What Is Wrong with Kashmir's Finances?", in *Economic and Political Weekly*, May 9, pp. 845-846.
- Rai, Mridu, 2004, *Hindu Rulers, Muslim Subjects: Islam, Rights, and the History of Kashmir*, Delhi: Permanent Black.
- Rasool, G. and Minakshi Chopra, 1986, *Education in Jammu and Kashmir: Issues and Documents*, Jammu: Jay Kay Book House.
- Sahni, Sati, 1999, *Kashmir Underground*, New Delhi: Har-Anand Publications.
- Sheth, D. L., 1979, "Politics of Caste Conflict", in *Seminar*, 233 (January), pp. 29-36.
- Swami, Praveen, 2007, *India, Pakistan and the Secret Jihad: The Covert War in Kashmir, 1947-2004*, London: Routledge.
- Verma, P. S., 1994, *Jammu and Kashmir at the Political Crossroads*, Delhi: Vikas Publishing House, 1994.
- Yasmin, Effat, 2004, *Sales Taxation in Jammu and Kashmir*, New Delhi: Mohit Publications.

要旨

本稿では、1982年にジャンムー・カシミール州（インド）の南カシミールで起きた禁酒運動の詳細を明らかにすると同時に、この事件をめぐる新聞報道の分析を通じて、インドの政治言説におけるセクラーな主体の再考を試みる。

1982年3月に南カシミールの中心都市アナントナグで分離主義団体ピーブルズ・リーグが起こした禁酒運動は、カシミール地元のウルドゥー語紙では広範な町民の支持を得た市民運動と報道された。だが、この運動が攻撃対象とした数軒の酒屋の経営者がすべてマイノリティー（ヒンドゥー教徒）だったため、この運動はインド全国英字紙ではイスラム原理主義的で反ヒンドゥー的な事件と

報道された。これらのカシミール地方紙、インド全国紙はいずれも自らの言説を「セキュラー」と見做したが、ともにマジョリタリアニズムを含み持っており、歴史的なセキュラー言説がしばしば持つ偏りを露呈するものだった。

Summary

How Was the Anti-liquor Movement in Kashmir Reported?: Print Media and Secularism in India during the Early 1980s

Toru Tak

Was the 1982 anti-liquor movement in Anantnag (South Kashmir) a secular citizens' movement or a fundamentalist violence against Hindu minorities? Kashmir's local Urdu press and all-India English press had framed the incident differently, but both claimed one's viewpoint as secular. Now contentious was the hidden, majoritarian agenda beneath the professed 'secular' stand: all-India papers represented the Hindu majority of India, while Kashmir's local paper did the Muslim majority of Kashmir. This paper examines how the majoritarian agenda of each worked in reporting the anti-liquor movement.

In sum, all-India papers reported that the 'communal' attack on liquor shops in Anantnag, which were incidentally all owned by Hindus (Kashmiri Pandits), was the handiwork of Jama'at-e Islami, which actually played only a secondary role in the incident. The consequence of this tendentious reporting was the indiscriminate arrest and alienation of Muslim separatists in Kashmir. On the other hand, Kashmir's local papers reported that the anti-liquor movement in Anantnag was a non-communal citizens' movement, representing the conscience of majority of the townsfolk. As a result of such reporting, the sufferings of minority Hindus tended to be ignored by the town's Muslim majority.

By the early 1980s, the structure of discourse in Indian press had become increasingly complex: now the self-claimed 'secular' discourse could contain covertly majoritarian and communal stance. When 'secular for all' neutrality is difficult to attain even in media discourse, and 'secular for India' and 'secular for Kashmir' remain far from each other, the discord called Kashmir conflict is to linger on.